
大人へ

風之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人へ

【Nコード】

N50130

【作者名】

風之

【あらすじ】

好きな相手に告白されたのに、返事を保留にした主人公。その理由とは。

（前書き）

昔書いたものを、そのまま載せました。校正なしの、気持が先走った作品ですが、当時の自分の気持ちをそのままにしたかったので修正は加えてません。大人になることの、当時の僕なりの答えです。

ちなみに、主人公に嫉妬、もしくは殺意がわくかも知れません。お気を付けください（作者は書きながら嫉妬しておりました（笑））

「もし、よかつたら、私と、付き合ってください！」

春。昼間。誰もいない体育館。少し離れたところにはキャンパス。目の前には、緊張した表情のあこがれの相手。

頭が真っ白になり、思考が追いつかず、何かを言おうとする。口を開き、閉じ、また開き、また閉じて。その一瞬の間に頭の中を廻った思考。三度目に口を開いた時、強く吹いた春風と共に、返事の言葉が流れた。

そいつは一度、恋人に振られていた。

高校二年生の秋に付き合い始めたが、進学先が別々になった彼女に、フラれたのが大学入学直後の五月中旬。そうして半年ほどかけて立ち直り、今は新しい彼女を大学でつくり付き合っていた。一人目の彼女に告白しようか悩んでいる時、その彼女にフラれた時、いつもそいつは自分に相談をしてきた。恋愛経験もない自分に。それでも、そいつのことが心底好きだったから自分もない頭を絞りいろいろなアイデアを考え、助言もしようとした。結局のところ自分はほとんど役に立えず、頑張ったのはそいつ自身だった気がする。

そうして現在、めでたく大学二年生を迎えた自分は、そいつの家の呼び鈴を鳴らしていた。どたどたと音がして、引き戸の玄関が開かれる。

「よ、いきなり邪魔して悪いな、岡島」

そう言っさなだひろきて呼び鈴を鳴らした張本人、真田弘樹は手土産のお菓子を持ちあげて見せる。

「別に気にしてねえよ。久しぶりなんだし、とりあえず上がれよ」
そう言っおかしましゅんて真田を家の中に入れた岡島俊は、先頭に立って歩いて

いく。真田も後に続き、二回の岡島の部屋に案内された。

「なんか飲み物持ってくるから、適当にベッドにでも座つてくれ。お前紅茶はだめだっけ？」

「できたらコーラくらいはじけたやつがほしいね」

「了解」

そう言つて岡島は一階へと降りて行つた。真田は岡島に指定されたベッドに腰掛けながら、部屋の中を見回した。

窓際には壁にくつつけられるように勉強机が置かれその隣には本棚。反対側には真田が腰掛けるベッドと、壁にはクローゼットがあった。クローゼットの隣にはコンポなどが置かれている棚があり、写真縦に入つた写真が飾つてあつた。

以前来た時とほとんど変わつていない部屋の中。唯一変わつているのは、写真縦に入っている写真の一枚が、今の彼女と一緒に写っている写真だということだけだろうか。

その写真を見て、真田は少しだけ胸の部分を抑える。写真に写っている二人は笑顔で、とてもうれしそうだった。その幸せそうな二人の笑顔を見ていて、真田は胸がどこか苦しくなるのを感じた。

そうしていると、扉の外から近づいてくる足音が聞こえ、やがて二人分の飲み物を持ってきた岡島が表れた。

「ほれ、希望通りのフアント」

「俺、いつフアントがほしいって言つたっけ？」

「コーラくらいはじけてるぜ？」

「確かに。サンキュー」

真田はお礼を言つて、一口フアントを口に含む。口の中で泡がはじけて、心地よいしびれが下の上を走り抜ける。

「で、いきなりどうしたんだよ？ 直接会つて話したいって？ 好きな女がようやく出来たのか？」

岡島が机の椅子に腰かけながら聞く。岡島は以前から、真田に好きなやつはいないのかときりに問いただしていた。そのたびに真田ははぐらかしていたのだが。

「ま、もうその女の子に告られちゃった後なんだけど」

「マジで？」

脊髄反射ではないかと疑うくらい、素早く岡島が驚く。そんな反応を予想していた真田は、平静を装ってフアントをもう一度口に運ぶ。口の中ではじける泡の感触とともに、高なる心臓を抑えようとする。

「お前、好きな子いたなら言えよ！　つか、自分で告白しろ！」

「いやー、説明すると長くなるんだけど、告白するのはもうちょっとあとにしようかなって思ってたんだよ」

「ウソ言うな。怖くて告白できなかっただけじゃねえのか？　へたれか」

「いや、今回話したいのってそれに関することなんだよ」

岡島の顔が面白半分の表情からすこし疑問を持ったものへと変わる。

「それに関すること？　お前が告られて、付き合い始めて、その経緯でも話したいのか？」

「いや、話したいっていうか相談なんだけど」

「なんだ、誕生日プレゼントに何を買えばいいのかわからないとか？」

「いや、それ以前の問題があるんだよ」

真田はもう一度フアントを口に入れる。口の中が渴いて、口の中ではじける泡は水分を補給する上で邪魔にしかなくなっていた。

「それ以前？　言ってる意味がさっぱりなんだけど」

「実は、まだ返事してないんだよ」

今度は、岡島の時間が止まったように反応が返ってこなかった。それどころか椅子に座って固まったまま微動だにしない。その脳内では、いま真田が発した言葉がしきりに繰り返されているのだろう。など、真田は勝手に考えていた。

「えっと、何それ？　好きな女の子に告られたんだろ？」

たっぷり五秒ほどの反応時間をかけて、岡島が質問する。真田は

そう、とうなずいた。

「で、なんでまだ返事してないわけ？」

真田は、いまだかつてこれほど疑問に満ちた表情を見たことがなかった。それほど、岡島の戸惑いがひどかったということだろう。

「今回相談したいのは、そのことなんだよ」

「意味がわからん。もったいぶらずに早く言えよ」

よく言うぜ、と真田は内心で思う。一人目の彼女に告白する前、一人目の彼女にフラれたあと。その両方で相談を持ちかけられた時、岡島はそれはうじうじとしていてなかなか言いたいことを口にしようとはしなかった。今考えれば、その気持ちもわからないでもないが。

それでも話さないことには前には進まない。真田は残りのファンタをすべて飲み干し、そしてこう言った。

「岡島、どうすれば大人になれると思う？」

岡島の顔がさらに疑問で埋め尽くされる。しかし真田にとって、この一言より今の疑問を的確に表す言葉はないと思っていた。

「えっと、意味がわからん。話が अच्छي 飛んでるんだけど」

「飛んでねえよ。きちんとつながってる」

「お前さ、こんなわけのわからないキャラだったっけ？」

「うるせえ。テンパってるからしょうがねえだろ」

はあ、とため息をついて、岡島は紅茶を一口飲む。その間に、何から尋ねようか考えているようだった。

「わかった。お前がまじめなのはよくわかったけど。まずなんで俺にそんなこと聞くわけ？」

「お前が変わったと思うから。もっとよく言えば、大人になったと思うから」

「大人になった？ 俺が？」

岡島は素っ頓狂な声をあげた。しかし、真田ははぐらかさずきちんとうなずいた。

「いや、そうでもないだろ。つか、大人になるってどういう感じ？

俺大人になるってよくわからないんだけど」

「なんか、自分の考えをしつかり持つようになったっていうか、芯が強くなったっていうか、そういう感じ。なんていうんだろ、少し物事への対応が大人びたっていうか……」

上手く口にできないことを、真田は口にする。それでも、若干二ユアンスは伝わったようで、岡島は照れ笑い。芯が強くなりたいと、以前岡島は口にした時があったのだ。それは恋人にフラれた時だったのだが。

「いや、そうでもないだろ。お前の言いたいことは何となく伝わったけど、俺はまだそれほど大人にはなってねえよ」

「謙遜するなよ。顔が照れてにやけてる」

「んなことねえよ。まあ、うれしかったのは事実だけ」

そう言っただけ岡島はもう一口紅茶を飲む。真田も飲むとしたが、コップはすでに空だった。

「んじゃ、いきなりなんで大人になりたいとか聞いてくるんだ？」

岡島が次の質問に移る。真田は口に何か入れたくて、自分が勝ってきた菓子の袋を開けた。口にお菓子を放り込むと、水分がスナック菓子の奪われて口がまた渴く。

「さっきも言っただけじゃねえか。好きなやつに告られたって」

「脈絡持たせてしゃべれよ。わけわからないんだけど」

「察してくれ。テンパってるんだって」

「……飲み物お代わりするか？」

岡島が気を利かせて聞いてくる。これ以上ぐいぐい聞いても無駄だと思ったのだろう。

「おう、悪いな」

「俺が飲み物持ってくる間に、どうやって説明するか考えておいて。そう言っただけ岡島は真田のグラスを持って部屋から再び出ていく。真田は言われたとおり、どうやって説明しようかと頭を働かせようとした。

しかし、その瞬間浮かんできたのは目の前でこちらを真剣に見つ

めているあの子の顔。とたんに顔が赤くなるのを感じて、真田はスナック菓子を口に放り込む。それでも頭の映像は消えず、それどころか余分な者までいろいろと浮かんでくるため、真田はさらにスナック菓子を口に入れていった。

今度はほとんど時間をかけずに岡島が部屋に戻ってきた。手にはファンタが入ったグラスと、ジュースが入ったペットボトルが握られている。真田が次にお代わりしてもいいようにと持ってきてくれたらしい。

「で、説明考えたか？」

「だから、告られたとき、考えさせてくれ、って返事したんだって」「テンパリ過ぎだろ！　ここまでお前が打たれ弱いとは思わなかった」

「悪い。なんかこういう話聞くのはいいけど話したくないんだって」「話すためにここまで来たのか？　頼むぜ、おい」

岡島はそう言って手に持っていたグラスを真田に渡す。真田はお礼を言って受け取ると、その中身を一気に半分ほど飲み干す。口とのを程よい刺激が走り、ようやく真田は一息つく。

「よし、なら順番に行こう。まず、お前は好きな子に告られた」

「おう」

「で、考えさせてくれって言ったわけだ」

「そう」

「じゃ、何で好きな子相手に考えさせてって言ったわけ？」

そこで真田の言葉が詰まる。少しの間部屋に沈黙が降りた。

「だから、俺は大人になりたいんだって言っただろ」

五秒後、ようやく返事をした真田の言葉を聞いて、再び部屋は沈黙が支配する。その言葉の意味を岡島はゆっくりと考え、そしてゆっくりと口を開いた。

「つまり、お前は自分が大人になってないから断ったのか？」

「断ってねえよ。考えさせてくれって保留にしかただけだ」

すかさず真田が反論するが、岡島は気にしない。真田が先ほど開

けたスナック菓子を一つまみ取り、それを口へと運んだ。

「まあ、俺にはどっちでもいいんだけど。まだ俺にはわからん。大人になつていないことが何で保留にすることになるんだ？」

「なんでって、そりやお前、その…」

真田は上手く言葉が見つけれずまた口ごもる。頭が上手く動かず、なんとか動かそうとするととたんに告白された時のシーンが頭に浮かんでくる。

「とにかく、断ったんだって！」

「お前さっき保留にしたって訂正したじゃん！」

真田の叫び声にしっかりと岡島がつっこむ。もう何が何だかわからず、真田はまたフアンタを口に入れて一息ついた。

「なんなんだ？ 大人になつてねえから保留にした？ 大人になつてなきゃ付き合っちゃいけないのか？」

「いや、だって、そうだろ。その、もつと自分に自信を持つてからじゃねえと。なんか、しっかりと付き合えないっていうか、振られるんじゃないかって思つて」

ぼそぼそといいながら、真田はうつむく。もう自分としては理由をしっかりと述べているつもりなのだが、岡島はまだ分らないのだろうか。岡島の反応が気になり、視線をあげると、そこにはこちらを凝視する岡島の顔があった。

「うおっ、びっくりするなおい。ビビるからそんなこっち見るなよ」

とっさに真田が後ずさると、岡島はすつと視線を外して口に紅茶を含む。それを飲み込んでから、ゆっくりと口を開いた。

「ま、だいたい分かった。要は、お前は自分に自信がないから、付き合いたしてもすぐに振られるんじゃないかって思つて、考えさせてくれって言つたってことか？」

部屋に再び沈黙が訪れる。ん？ と促すような岡島の視線に促されると、真田はそういうことだと思つ、と呟いた。それを聞いて、はあ、と岡島はあきれたようにため息をつく。

「で、自分に自信を持たせたいから大人になりたいと？ そのため

に大人になったと見える俺に相談しに来たっていうことか？」

「そう」

「お前、おかしいだろ」

いきなり笑いだしながら、岡島が言った。

「おかしくねえよ！」

「おかしいわ。わけがわからねえ。そこ保留にするところじゃねえ。つか、保留にした理由がそんなことだってしつたらその子にもバカにされるぜ？」

「うるせえな」

上手く反論できず、真田はとりあえずそう返す。岡島はなおも笑ったまま話し続けた。

「いや、そう思うし、実際お前はおかしいだろ。だって、そこ迷うところじゃねえもん。なんで付き合う前から振られること考えてるんだよ？」

「うるせえな。お前は考えないのかよ！」

「考えてもはじまらねえもん。だいたい、お前は告白されたんだぜ？ 告白する前に振られることは考えるけど、告白されて付き合いだしたことを考えて、その後のことまで考えるとかおかしいだろ」

「世の中そういうものいっぱいあるじゃねえか。そうやって考えちまうって！」

「んじゃ、振られればいいじゃん」

笑いながらそういった岡島の言葉に、真田の頭には怒りよりも先に疑問が浮かんでくる。はあ？ と素っ頓狂な声をあげると、岡島はさらに続けた。

「振られればいいじゃん。そんなもん、そう考えないとやっていけないぜ？」

「いや、振られればって。それじゃ付き合う意味ないんじゃない？」

「じゃあこのまま付き合わないのかよ。それはそれで意味ないじゃん」

う、と真田は言葉に詰まる。岡島は笑いながら、さらに言葉を重

ねていく。

「だいたい、自分に自信ないとかで付き合っの戸惑ってたらダメだろ。これが結婚ならまだわからないけど。自分が安定していない職についてないとか、きちんとやっていける自身がないとか。そういうものはあると思う。けど、付き合うことにはそんなの必要ないだろ」

「でも、やっぱり自身持った状態で付き合いたいじゃん」

「そんなこと言ったらいつまでたっても付き合えねえよ。じゃあ仮に、付き合うために自分を大人にしようとする。その時、大人になる過程でお前自身の大切な部分まで変わっちゃう可能性もあるわけだ。でも、それじゃダメだろ。その告白してきた子は、今のお前が好きなんだから」

当たり前のことに気づかされて、真田ははっとなる。岡島はなおも続けた。

「それに、大人になる方法を聞かれても、俺はやっぱり、振られるとしか言いようがない」

いきなりわけがわからないことを言われて、真田は首をかしげる。岡島は紅茶をもう一口飲んだ。

「お前が言っみたいに、俺は変わったかもしれないねえ。大人になったかもしれないねえ。でも、それは俺が振られるっていう経験したからだと思う。告白できずに悩んだからだとも思う。大人になるためにはさ、結局そうやって悩むしかないんじゃないか。いろんな嫌なこと経験して、その都度悩んで乗り越えていくしかないと思う」

その言葉で、真田の胸の中のものもやが消えていくような気がした。今までかかっていた霧が消えていくような、そんな感覚を覚える。

「いろんな本読むとか、難しい映画見るとか、そういうのも大人になるための条件なんだろうけど、一番大切なのはそういう経験だと思っぜ。で、その嫌な経験から逃げずに悩んで苦しんで、それ乗り越えてやっと大人に近づけるんじゃないか？ それでいいんじゃないか

えか？ 振られて、悩んで、変わって。またその変わった自分を、今度は別の人が好きになってくれて。そういうもんだと思う」

告白する前に悩み、振られてからはそれをふっ切るのに半年かけ、その都度悩んできた大人の言葉だった。それら乗り越えてきたからこそ言える、重みのある言葉。その言葉の中には、確かに岡島が大人になった背景が、悩みが、苦しみが、経験がこもっていた。

「だから、お前も付き合え。そんで振られる。振られればそれにまた悩んで成長すればいい。将来別の人と結婚するときの肥やしになればいいじゃねえか。そんな悩むな」

真田の顔が、ゆつくりと笑顔に変わっていく。この家に来て、初めて見せる照れ笑い以外の笑顔だった。

「なんか、俺はお前の力になってやれなかったのに、お前には助けられてばっかな気がする」

「そんな事ねえよ。告白するときも、フラれた時も、話聞いてくれただけで結構助かったんだぜ？」

その言葉が本心かどうかはわからないが、真田は心底こう思った。こいつと友達になれて、本当に良かった、と。

春。昼間。誰もいない体育館。少し離れたところにはキャンパス。目の前には、緊張した表情のあこがれの相手。

胸の動悸が高鳴るのを感じる。これから始まる新しい生活に、不安と期待が混ざった緊張感が体を駆け巡る。

大きく息を吸い込み、吐き出し、また吸い込んで。

大きな一歩が、踏み出された。

（後書き）

岡島「前書きにも書かれてるけど、このシチュエーションはないだろ」

真田「世の中の恋に悩める人全員に喧嘩売ってるよな」

作者「ごめんなさい！作者も恋に悩んでいる人間なので許してくださいー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5013o/>

大人へ

2010年10月24日22時25分発行